

第2回若手研究交流会報告

1. 概要

- ・講師：黄美蘭会員・近田由紀子会員
- ・実施日時：2016年11月19日（土）13:30～17:00（受付は13:30より）
- ・実施場所：お茶の水女子大学 共通講義棟1号館 302室
- ・当日の進行：

13:00－13:30：開場&受付

13:30－13:40：開会の言葉（野山委員長）

13:40－14:10：講演会 ①黄美蘭会員

テーマ：留学生の日本での学位取得と就職～海外で子育てをしながらの研究や仕事について～

14:10－14:40：質疑応答

14:40－15:15：講演会 ②近田由紀子会員

テーマ：ささやかな人生の願いにつながるキャリアはどのようにつくられてきたか～小学校教員としての実践・葛藤・受容、人とのつながりを機に、新たな探究活動へ～

15:15－15:45：質疑応答

15:45－16:00：休憩

16:00－16:40：参加者の自己紹介&講演者を囲んだ茶話会

16:40－16:45：名刺交換&アンケート記入

16:45－16:50：閉会の言葉（野山委員長）

17:15：懇親会（自由参加、お茶大付近のレストランにて開催）

- ・参加者：12名（懇親会の参加者は委員3名を含む10名）

2. 内容

2.1 講演「留学生の日本での学位取得と就職～海外で子育てをしながらの研究や仕事について～」

現在、首都大学東京、国際センター特任助教を勤めておられる黄美蘭会員より、日本において子育てをしながら、どのように学位取得や就職を行ってきたのか、現在の状況や葛藤、課題についてお話しいただいた。黄会員はこれまで在学中に第1子、就職後第2子を出産し、育児をしながら研究や仕事を続けてきた。学業と仕事、子育てを両立できたのは、家族や指導教員とゼミの仲間、現在の職場の上司や同僚など周囲の理解やサポートが大きかったという。また、元留学生である黄会員は、第1子の小学校入学に伴い、母国である中国と日本の小学校の文化や習慣の差異に戸惑いを感じつつ、日本の学校文化への理解を深めている様子が語られた。

質疑応答に関しては、「日本で留学生として、出産、育児、研究をしないといけないという状況から生じる葛藤をどのようにおさめたのか」という参加者からの質問に対し、黄会員は、「発表でも述べたように、家族のサポートとゼミ生や指導教員に支えられ、あまり葛藤を感じずに進めてこられた」と答えた。また、「大変な状況のなかでも、如何にして研究を続け、これからもやっていこうと思えたのか」という質問に対しては、「研究者という道を選んだ以上、次のステップに行くためには研究を続けざるを得ない。現在の仕事は任期付きの仕事であり、安定な仕事に就けるように、できるだけ研究業績を積んでいこうと思う」と答えた。

2.2 講演「ささやかな人生の願いにつながるキャリアはどのようにつくられたか～小学校教員としての実践・葛藤・受容、人とのつながりを機に、新たな探究活動へ～」

近田由紀子会員より、小学校教員として、特色の異なる様々な小学校でどのような実践を行い、葛藤を抱え、そこからどのような学びを得たのかという点を中心にお話いただいた。近田会員は、自身の海外体験や学術的な学びなどの自己実現や、「どの子も最大限の力が発揮できる明るく楽しい学校」の実現という理想に向かい国内外でキャリアを形成してきたという。講演の最後は、「全てがつながり、無駄なことは一つもなく、目的に向かう小さな日々の選択や行動がキャリアを形成していく」という若手研究者に対する励ましの言葉をいただいた。

質疑応答に関しては、参加者からの「目標に向かっていくなかで、色々な挫折の経験や葛藤、悩みもあったと思うが、なぜ歩み続けられたのか。」という質問に対し、「悩む時期もあったが、落ち込み続けないようにし、今自分にできることは何かを考えた。挫折する時もあるが、必ず好転すると思って焦らずに、自分にできることをやっていくことが大事だと思う」と答えた。また、「博士課程や仕事において学んだことを今後どのように発信していこうとしているのか。」という質問に、「今年12月から文部科学省の外国人児童生徒への教育支援プロジェクトオフィサーに着任する予定であり、今後は行政の立場から、これまで学んできたことを最大限に生かして、現場で必要とされる政策についてより具体的に発言していきたい」と答えた。

3. 茶話会の様子

茶話会は2つのグループに分かれ、それぞれのグループに講演者1名が入り、行われた。参加者の自己紹介、講演会に関する質問が行われたり、現状報告や現在の課題と悩みなどに関して共有し合ったり、活発な談話が行き交う場となった。

講演者の黄会員が入ったグループでは、それぞれの専門の話や情報交換が行われた。ま

た、研究の捉え方について意見交換が行われ、参加者から、教育現場で疑問を感じるようなことがリサーチクエスチョンであり、常に日常が研究につながっていることなどが語られた。

講演者の近田会員が入ったグループの方で話題として盛り上がった1つに、「研究とは何をするのか」ということがあった。例えば、学校現場の教員を始め、「現場」を持っている人間にとって「研究をしたい」とは、そもそもどのようなことを指すのかということであった。近田会員からは「私の中では実践することと研究することは同じこと」という話があった。

それぞれのグループにおいて、教育現場と研究のつながりに関する議論が行われたことから、このことは若手研究者にとって共通した関心事であると考えられる。

4. アンケート結果のまとめと今後の課題

参加者に記入を求めた選択回答と自由記述の二部から構成されるアンケート結果を簡潔に述べる。アンケートは参加者全員に配布し、参加者12名のうち10名から回収ができた。まず、第一部では「講演会への関心」「茶話会への満足度」「参加者間のネットワーク構築の達成」「今後の若手交流企画への参加希望」について、「強く当てはまる」から「あまり当てはまらない」までの4段階評定で回答を得た。すべての項目について全員が「強く当てはまる」と「やや当てはまる」と回答し、概ね企画に対する評価が高かった。すべての項目において学会大会で開催された第1回若手交流企画よりも参加者の評価が上がっており、特に前回、やや低い評価（参加者全体の70%が「強く当てはまる」と「やや当てはまる」と回答）であった参加者間のネットワーク構築についても評価が向上した。これは、茶話会や自由参加の懇親会などの機会を設け、参加者間の自発的な交流の場が設定できたからだと考える。

次に、第二部では感想やコメント、今後の若手交流会での企画に関する要望などについて自由記述形式の回答を求めたところ、7名の自由記述が得られ、12件の内容が得られた（1名の記述に2つ以上の内容がまたがって記載されている場合は、1つの内容を1件と数えた）。自由記述の内容を分類したところ、企画で刺激を受けたことや交流の有意義な機会であったことなど「企画全体への肯定的な評価」が5件、講演者への共感や学びを得たことなど「講演会に関する肯定的な評価」が4件、企画の継続や継続的参加の意思など「企画継続の要望」に関するものが3件で全て企画に対し好意的な内容の感想であった。

これらのことから、企画全体に対し、参加者の評価は概ね高いものであり、第1回若手交流企画で課題となったネットワーク構築のための機会提供が、第2回企画においては、概ね達成されたと考えられる。今後は、講演会以外にも多様な企画を考えたい。また、継

続して、若手研究者間の自発的なネットワーク構築を促進するための企画を続けたい。